働くあなたのクリニック

CLINIC

産後出血について

「妊娠、出産は病気じゃない！」よく聞かれるこんな言葉があります。

確かにほとんどの人は、普通に妊娠し、出産し無事退院していきます。

しかし中には新生児の異常や、妊娠、出産前後の母体異常により様々な医療介入が必要となることがあります。

時には産まれてきた赤ちゃんが亡くなったり、お母さんが亡くなったりすることもあります。

Q どれくらいのお母さんが亡くなりますか。

日本でも明治時代は年間約6000人のお母さんが妊娠出産で亡くなっていました。衛生環境の改善や医学の進歩、病院・産院での出産が増えたことで、どんどん減少し、現在は年間50人前後となりました。岐阜県でも年間1人くらいの方が亡くなっています。

Q 亡くなる原因は何でしょう？

多いのが産後多量出血です。

お産には出血がつきものです。普通のお産でも500㎖くらいの出血がありますし、帝王切開では1ℓ近く出血することも珍しくありません。

現在亡くなる方は少なくなりましたが、大学病院など大病院では毎月何人もの方がお産の後出血が止まらないとのことで搬送されてきます。死の一歩手前で何とか助かったという人も少なくありません。

Q なぜ多量出血は起こるのでしょうか？

原因としてはいろいろあります。

常位胎盤早期剥離。お産の時に産道が切れたり、裂けたりする産道損傷。あるいは子宮破裂と言って子宮自体が破れてしまうこともあります。

胎盤が出てくるときに子宮が裏返って出てくる子宮内反症、靴下を脱ぐときに靴下が裏返るようなものですね。

癒着胎盤、児が産まれると胎盤が出てきます。通常胎盤は脱落膜という薄い膜を介し子宮とくっついています。この膜がうまくできないと、胎盤組織が子宮の筋肉の中に入り込み子宮と一体化して胎盤がはがれてこない状態です。

またわれわれ産婦人科医が最も怖いのは前置胎盤です。胎盤は通常、子宮の上のほうにできますが、前置胎盤とは胎盤が子宮の入り口（胎児にとっては出口）をふさぐようにできてしまう状態です。子宮の入り口は非常に不安定です。出産が近づくと徐々に柔らかくなって開いて来たりします。そうすると胎盤がはがれて大出血をきたします。また胎児の出口をふさいでいるので、通常分娩はできません。帝王切開になります。前置胎盤が怖いのはこれだけではありません、子宮の入り口に近いところは脱落膜ができにくいことがあり、癒着胎盤を合併することも少なくありません。また胎盤へは赤ちゃんを育てるために多量の血液が流れ込んでいます。胎盤がはがれるとき胎盤と子宮をつなぐ血管も切れます。血管が切れると出血しますが、子宮は筋肉の塊です。子宮が一気に収縮することにより、出血した血管を自分で抑え込んで出血を止めてくれます。子宮の収縮がうまく起こらずに多量の出血が起こることを弛緩出血と言いますが、子宮の入り口近くは収縮もしにくく、それによって出血も増えます。このように子宮が収縮せず多量の出血をきたす、弛緩出血も多いです。

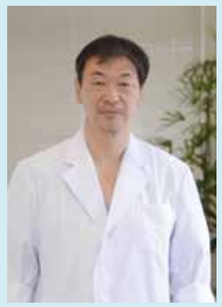
Q どのような治療があるでしょうか。

まずは出血を止めることです。傷があればそれを縫合したり、子宮収縮剤で子宮を収縮させたり、ガーゼを詰めて圧迫したり、最悪の場合は子宮を摘出したりします。

近年は動脈塞栓術といって、脚の付け根からカテーテルを挿入し出血している血管に詰め物をして出血を止める方法があります。この方法により子宮をとらなければならない症例がぐっと減りました。

妊産婦の死亡は出血でだけではありません、このような悲劇を少しでもなくすには、ハイリスク妊娠のスクリーニングと対策です。そのためにも妊婦健診をきちんと受けましょう。

今月の先生



岐阜市民病院　産婦人科

豊木　廣 先生

○役職
婦人科腫瘍部長
産婦人科副部長
○主な資格、認定
日本産科婦人科学会専門医
母体保護法指定医